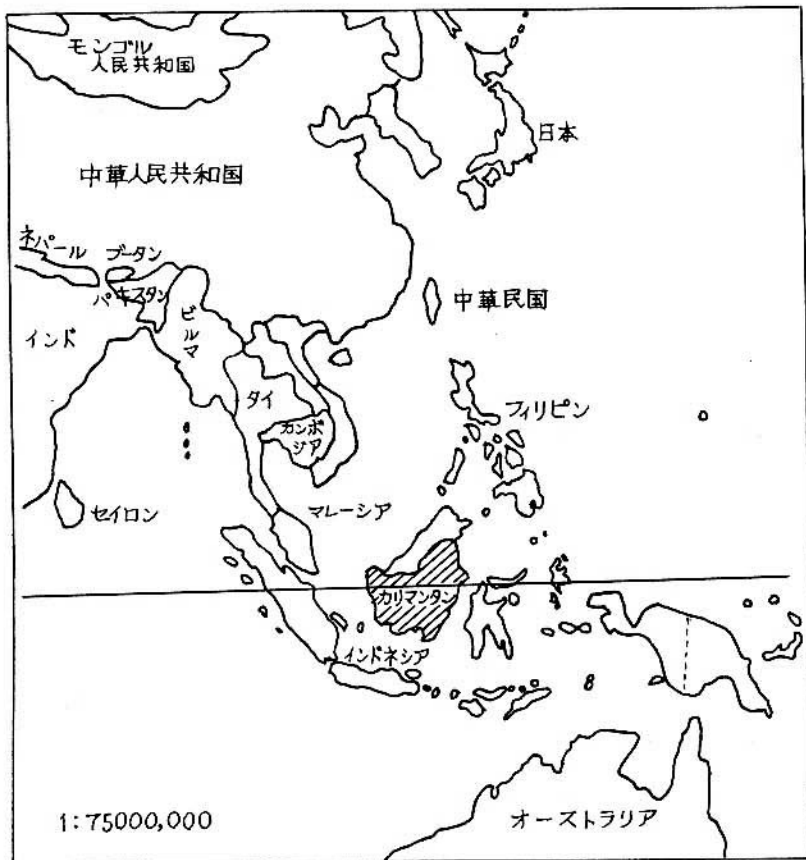


カリマンタンの「カンボン」から

松 宮 登



穏やかな海に散在するこれらの島々は、海岸から熱帯雨林の豊富な植物が旺盛な生命力を見せて繁茂し、覆いつくされ、目射る強熱な太陽に曝されて文字通りのエメラルドグリーンに輝き、その景観はそれに接する者をして、近ずきたい神秘的な美しさに身を戦慄させるほどである。

さて、この「首飾り」のほぼ中央に位置する最も大きな島が「カリマンタン」(旧ボルネオ)である。また、カンボン(Kannong)というのはインドネシア語で「部落」とか「集落」とかに当る言葉である。これに対

“エメラルドの首飾り”

遙かなる「大航海時代」の後、350年にわたってインドネシアの群島諸島を植民地として支配したオランダ人たちは、この赤道直下の強烈な太陽の下に散らばる大小無数の島々の自然の美しさと、そこに秘められた富の可能性とを、「赤道にかけられたエメラルドの首飾り」にたとえたとされているが、この表現は、まさに当を得て妙である。

して「都市」を、サール(Kotakbesar)と呼ぶが、人口の60パーセント以上が農民であるインドネシア全体を見れば、ユタの数は少なく、ほとんどの人々がカンボンに生活している。

そして、私達が最終的に訪れたのは、バリト河の河口にある南カリマンタン省の首都パンジャルマシムから北東に約200キロメートル、東カリマンタン省との境界となっているムラトス山脈の

奥深い密林にひっそりと生活するハロセン
(Harosan) 族のカンボン、バガランプルであっ
た。南緯2度50分。標高約1500メートル。

“「ジャングル」のイメージ”

ところで、「熱帯の密林」、「ジャングル」、「原始林」といったことばを聞くと、私達は「昼なお暗く木々が生い茂り、背丈を越える巨大なシダや腕よりも太いツルがからみ合って行く手を阻み、それらをバッサバッサと切り開きながら道なき道を行軍する探検隊と、その一行を樹の上からジッと狙うヒョウや大蛇……。」と云ったシーンを想い浮かべ、何となく息苦しい無気味なイメージを抱きがちである。たしかに、ここも樹皮を厚いコケに覆われた樹高30メートルはありそうな巨大な木々が空を隠して薄暗く、とても踏み込めそうにない私達のイメージ通りの、いわゆる「熱帯のジャングル」なのであるが、注意深く眺めてみると、すべてが一様にそんなところばかりではないことがわかってくる。この密林に生まれ、この中を生活の場としている人達は、どうやらそんな労多くして益のない無駄骨は折らないことにしているらしい。彼らの通る道はちゃんと原始林の密度の薄い部分を巧妙に選んでつけられているので、それをたどってゆくかぎり、勿論優秀なガイドがあつての話だが、日本の山岳地域の山道を歩くのとさして変りはない。ただ、腰をおろしてひと休みしている時に、新聞紙ほどもあろうかと思える巨大な枯葉が舞い降りてきて突然バサッという音をたてるのに驚ろかされるのと、薄暗い谷間をつめて行くにしたがって右岸へ左岸へと流れに足をとられながらやたらに徒渉させられることさえがまんすれば、ジャングルの中の旅行は意外と快適である。だから子供の頃に見たジャングル旅行の記録映画のイメージを持って悲愴な覚悟を

してきた者にとっては、少々期待はずれの感がなくもないほどである。それと、もうひとつ意外に思うことは「赤道直下」であるにもかかわらず、たいへん涼しいことだ。うっそうと生い繁る巨木のせい、または次第に高くなる標高のせい、平地にあったあの目眩くような太陽もここまでは追ってこないとみえて、実にさむいくらいなのだ。特に、明け方などは毛糸のセーターを着ていても寒くて目が覚めるほどの冷え込み様……。一月の寒い日本を発つときに着ていたのを、人に言われるまま無駄を覚悟で持ってきたセーターだが、正直なところ、まさか本当にこれを着て震えながら眠ることになるうとは思ひもかけなかったことである。

“カンボンの生活”

こうして次第に狭まる沢を登りつめると、いよいよ道は最後の尾根に向って這い上ってゆく。しかもほとんどまっすぐに直登するのである。我々の常識からすれば当然ジグザグの九十九折の坂道を予想するところだが、ここでは、どんな胸突き八丁でもまっすぐ登りまっすぐ降りるのが常識である。急な斜面を息を切らしながら青息吐息で登りつめて峠に出ると、そこはもうハロセン族のテリトリー（勢力範囲）だ。今朝早く出発した先触れが知らせたとみえて、バガランプルからの迎えが我々を待っていてくれたので彼らと合流。例によってまっすぐに下る坂道を、谷底にあるという彼らの部落へと案内されることとなった。谷底に降りてしばらく行くと、何の前触れもなしにまったく突然に一軒の大きな高床式家屋が我々の眼前に出現して私達を迎えさせた。これがバガランプルである。

棟までの高さが10メートル、幅は20メートルもある公までに見たこともない巨大な家が深い

山奥の密林の中に忽然として現われたことは、私達を驚ろかせたばかりか、あたりの薄暗らさと相俟って何となく無気味な印象をさえ与えるが、2メートルの抗土に竹を並らべた床と竹を編んだだけの壁にサゴヤシの葉で葺いた入母屋型の大屋根は、落ついて眺めると、どことなく日本の農村にある藁葺き屋根の家に似ているようにも見える。その屋根の型が日本の藁葺き原理と同じで入母屋型だからだろう。ここはカリマタンの内陸部に居住する「原住民」は、(可口付近や海岸の住民は大部分後からやってきたマレー人種であるが)人種的には私達日本人と同じモンゴロイド(蒙古系)に属しているわけで。バガランプルの住人達は云うまでもなく私達とまったくよく似た身体つき顔つきをしている。だから、この人達といっしょに、先ほどの何となく日本の農家を思わせる家で生活していると、しばしば日本にいるような錯覚にとらわれることがあり、この生活に慣れるにしたがって、その傾向は強くなるのである。

たとえば、若者を連れて峠まで私達を迎えに来てくれた人は、この部落の長であったのだが、そのことが判明すると同時に私達は彼に「ソンチョー(村長)」というあだ名を献上することにした。実際、彼は常に部落のリーダーにふさわしい態度をとっていたし、無論顔は日本人そのものである。彼の持つ雰囲気は、「村長」のイメージにぴったりであった。それ以後は彼にカカ・グナン(カカは年長者に対する敬称で、兄という意味がある)という立派な名前があるにもかかわらず、私達はつい「ソンチョー!」と呼びかけてしまうのである。もっとも、彼にしてみれば迷惑な話で、最初のうちはまさか自分のこととは気づくはずもなく、そう呼んでも知らん顔をしていたものだが、ある晩、大勢が集まって雑談をしている折に、彼はおもむろに威厳を保ちながら私達に質問した。

「『ソンチョー』とは何を意味することばか教えてくれかね。」そこで私達は、謹んでそのあだ名の由来を説明し、村で最も偉い人を日本では「ソンチョー」と呼ぶのだと答えると、彼は彼なりに納得したらしく満足そうにうなづき、それと同時に「ソンチョー」の呼び名はたちまちにして衆人の知るところとなったのである。

そして「ソンチョー」はそのお返しに、次のような話をしてくれた。

「むかしむかしの昔、ダト・アダン(ダトは老人に対する尊称)という人がおってな、この世界をこしらえたのはこの人じゃった。そうして、テハウという人といっしょになって41人の子供を産んだそう。その41番目に産まれたダト・ラマンが、わしらハロセン族の先祖と云うわけじゃよ。他の40人もそれぞれの地方へ散って子孫を残したと聞いておる。おまえたちニッポン族も、この40人の内の誰かの子孫に違いないのだが、残念ながらわしは、おまえ達の先祖が誰であるのか知らんのじゃ。しかし、わしらハロセンの先祖もおまえらニッポンの先祖も兄弟なのじゃ。」

“ コ ミ ュ ー ン ”

さて、先に私はこのバガランプルを「部落と呼んだが、ここで注意すべきは、ここにはもともと、家が一軒しかないということである。私達の部落や集落という概念からは少しはずれているかも知れないけれど、現にここでは、この一軒の大家屋に18家族がいっしょに生活し、文字通りコミュニケーションを営んでいるのである。家の中は、中央部が大黒柱を中心にした30畳ほどの広間になっており、その周りを一段高くなった「ロビー」とでも呼ぶべき仕切りのない空間がとり囲み、さらにその外側にそって竹を編んだ壁で仕切った個室がぐると並んでいるという奇妙な間取りになって

いる。要するに、この家の中で、人目につかないところと云えば、外側に並ぶ各家族に分配された畳二枚を縦長に敷いたほどの広さの部屋に入るほかはなく、あとのスペースは屋根を支える30余本の柱以外、目をさえぎるものはない。これだと、通風効果が満点であることは確かであるが、そのかわり、プライバシーなんてものは、あったものではない。住人達は、野良仕事から帰ってくると、部屋の前の「ロビー」にある炉を囲みながら、しばし団らんの時を過ごすのを習慣としている。広間のまわりに団炉裏の火が燃えてそこに18家族が入り乱れて話の花が咲くので、それはもうたいへんな賑やかさである。たださえ賑やかなところへ、外の世界から妙な奴らがまぎれ込んだとあっては、それこそ大変である。顔も身体つきも変らないくせに靴をはきズボンをはき眼鏡をかけている。そして何よりも不思議なのは、仲間同志でしゃべる今までに聞いたことのない奇妙なことば等々……

私達は人々の好奇心の的となり、毎晩毎晩とりかこまれ、見つめられ、話しかけられ、はては私達の寝顔までが見物の対象となったのである。

ベチャクチャベチャクチャ、ワイワイガヤガヤ、井戸端会議ならぬ団炉裏端会議はここでも盛んのようにある。こうした喧噪の中に夕食が始まる。主食は米であり、その米は、山の中腹の斜面を焼き払った後に栽培した陸稲である。私達の滞在した5月はちょうどその収穫期にあたっていたので、昼間は一家総出で実りの収穫（といっても稲穂の先端を指でちぎり取るだけ）に忙しい時だったが、毎日その日の必要量の粃をウスでついただけ粃殻の混じった玄米を、水の入った青竹の筒に入れて、団炉裏の火にかけて炊くのである。こうして炊いた飯を手づかみで頬張りながら、大人達は四方山話を花を咲かせ、その間も子供達は、ふざけ合いな

ながら広い家の中を駆け回る。竹を割って簀子状に並べただけの床がカタカタと鳴るので、それに応じて大達の話し声はますます大きくなるのである。

こうした場面にも見られるように、ここでは「竹」が日常生活に大きく取り入れられることに気づく。現に、生活の根本とも言うべきこの大家屋からして、その大部分が竹からできているし、彼らのほとんど唯一の「私有物」とも藏える大小各種の籠もすべて竹を自分で編んでこしらえたものである。また、川から水を運ぶときにも竹筒を使うし、勿論燃料にもなる。そして、これらの用途に使われる竹は、このあたりに豊富に自生しているので、各人好きなときに必要なだけ、どこからか切ってきてても一向にかまわない。

要するに彼らにとっては「不動産」、いや、厳密な意味での「私有財産」などありはしないのだ。家族単位で所有しているかに見えるそれぞれの焼畑地にしても、それはただ単に、その土地の使用権がその家族にあるに過ぎず、相続されるべき土地所有権とはなり得ないのである。彼らのテリトリー内にあるものは、すべて皆のものである。「ソンチョー」は、それらの「共有財産」（彼ら自身には、このような財産の観念はないようだが）の管理者でしかない。だからここでは、自分でこしらえた物（稲や籠）だけが自分の所有物となるわけであるが、このような封鎖性が強い社会においては、自分の体得している生産技術は当然他人も同様に持っているものである。したがって、これらの生産物は同一テリトリー内におく限り、何ら交換価値を持ち得ないことになり、その結果として、富める者もなく貧しき者もない、支配者もなければ被支配者もない、自然と一体化して営まれる実に平和で穏やかな社会が現出されるのである。もしこの封鎖性が持続するならば、この生

活は今後も変ることなく維持され、同じ毎日が今後もくり返されるにちがいない。

しかし、今日の資本主義的物質文明が、この山奥の人々をそっとしておくことはとても考えられないことである。周知の通り、カリマンタンの原始林は木材の宝庫であるばかりか、その下には金、ダイヤモンドを始めとする種々の鉱物資源が豊富に埋蔵されていると云われているところの「未開発」地域である。これらの「富」の「開発」は、そこに住み続けてきた多くの先住者を無視して、今後も制御困難な加速度をつけて推進されることは想像に難くないが、はたしてそのような行為は許されるべきことなのか。

はたしてそうすることが、私達にとって最良の途なのであろうか。私達は「現代物質文明」が過去に残してきた「開発」、「進歩」、「発展」の足跡を今一度検討する必要はないのだろうか。

さて、原始林の夜が更けてくると、宵の喧噪も去って、人々は眠りに落ちる。三々五々囲炉裏の傍にゴロ寝する者、部屋の中に入って寝る者、い

ずれも裸同然である。明け方の寒さを予想してセーターを着ながら耳を澄ますと、外はまた雨のようである。「文明社会」の思惑がどうであれ、とにかく、遙かなる過去のかなたから今日まで、たくさんの大人と子供、男と女が密林の奥深くの一つ屋根の下に寄り添って、営々として維持してきた一つの共同生活がここにあることは、これまで見てきたことからしてもすでに明白な事実である。この状態にある社会が幸であるか、悲惨であるか、この状態を是とするか否とするかはこの社会の構成主体の判断に俟つよりはない。最後に、誤解を恐れずに云うならば、この社会は決して来るべきユートピアではなく過ぎ去った私達の過去でもなく、現在私達の社会に存在しているこの同一地表上に同時に存在している現実である。そして、その社会は、私達の社会のすでに失ってしまったもの、また、今私達の社会が必死になって探し求めているものを確かに内包していると私は思うのだが……………。

(O B)

関西最大の山とスキーの専門店です。



- あべの店 天王寺ステーションビル北向い
大阪市天王寺区堀越町119(猪木ビル1F)
☎06(779)5253~4
- 梅田店(登山・スキープロショップ)
阪急東通り商店街東詰 大阪市北区神山町77
☎06(361)9592代
- 梅新店(登山・スキープロショップ)
梅新東交差点南西角 大阪市北区神明町31
●登山店 ☎06(364)5081
●スキー店 ☎06(365)1245